

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2495 号

Surgical outcomes of interval laparoscopic appendectomy for appendiceal abscess and predictors of conversion to open surgery

膿瘍形成性虫垂炎に対する待機的腹腔鏡下虫垂切除術の手術成績と開腹移行リスク因子の検討

関根 悠貴 (せきね ゆうき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

本研究は、急性虫垂炎の 5-7%程度に合併する最も炎症の高度な膿瘍形成性虫垂炎に対する保存的治療後の待機的腹腔鏡下虫垂切除術 (Interval laparoscopic appendectomy; ILA) の治療成績を、従来のすぐに手術を行う緊急腹腔鏡下虫垂切除術 (Emergency laparoscopic appendectomy; ELA) と比較することでそのメリットを明らかにするのが目的であり、さらに待機的腹腔鏡下虫垂切除術の際の開腹移行リスク因子についてはじめて検討した研究である。

対象は膿瘍形成性虫垂炎に対して待機的腹腔鏡下虫垂切除術を行った ILA 群 (44 例) と緊急腹腔鏡下虫垂切除術を行った ELA 群 (14 例) で、両者の治療成績の比較を行った。結果、ILA 群では、開腹移行率 16%、合併症率 7% であり、ELA 群とくらべ出血量の軽減、開腹移行率の軽減、術後在院日数の短縮、術後合併症の軽減、の点で優れている結果であった。また ILA 群 44 例中、開腹移行のリスク因子の検討では、保存的治療時の CRP 値高値、抗生剤の変更の必要性、長い入院期間の 3 つの要素が開腹移行を必要とするリスク因子と考えられた。

今回の研究から、膿瘍形成性虫垂炎に対する保存的治療後の待機的腹腔鏡下虫垂切除術は、すぐに手術を行う緊急腹腔鏡下虫垂切除術より治療法として優れている結果であった。また保存的治療時の高度炎症が開腹移行のリスク因子となるものと思われた。